

《翻 訳》

カール・レンナー

『民族：神話と現実』(5)

太 田 仁 樹

- 偶然に本を発見 (第32巻第4号)
- 序言 (第32巻第4号)
- 民族の生い立ち (第32巻第4号)
- 主権を持つ法的権力としての民族国家 (第33巻第1号)
- 民族的共同体の法的緊急状態 (第33巻第1号)
- インターナショナルの基体 (第33巻第1号)
- インターナショナルなものの法的誕生 (第33巻第2号)
- 国際連盟 (第33巻第2号)
- 総連盟の憲法 (第33巻第2号)
- 講和条約のマイノリティ保護 (第33巻第3号)
- 純粋なマイノリティと不純なマイノリティ (第33巻第3号)
- 国内法制度としての民族的マイノリティ (第33巻第3号)
- 混合国家におけるマイノリティ国家 (第33巻第3号)
- 信仰, 民族, 国家 (本号)
- 国家的絶対主義と民族的絶対主義 (本号)
- ナショナリズムの転回点 (本号)
- 諸民族の物質的存在 (本号)

信仰, 民族, 国家講和

さて, もつれた個々の問題から, 再び全体についての総括的概観に向かおう。

民族(Nation)は, 長い歴史的過程を経て, 植物的集団から政治的な力になった。民族はわれわれの眼前でさらに進歩して, 政治的な力から, 今日の国家に完全に浸透している法的構成物になる。民族の国家へのこの着床, 国家への参入は, その合法化と同じことである。その過程は, 個人, 自治体, 地区, 郡, 地方, 州, 国家, 国際社会において, 生じている。それは, 諸民族の成長と変遷および生存競争を廃棄せず, 国際法が, 戦闘を訴訟手続きに変え, 国内法が, 国民内部の民族政党による政治闘争を憲法裁判所での民族団体の訴訟に変化させるだけである。それは, 軍事的・政治的な武装をするように常に強制されることから, 諸民族を自由にし, 同輩に対する完全な最終的勝利というほんやりとした期待を, 彼らから奪い取り, しかも敗北や滅亡の恐れから, 彼らを解放し, 法的保証, したがって経済的・文化的な大きな課題にとり組む真の自由を, 初めて彼らにもたらすのである。

しかし、法の担い手としての民族は、発展過程としては明瞭に現れているが、生成し出したばかりである。今日まで、諸民族の純粹で完全かつ有効な総連盟は存在しないし、複数の民族が住んでいる多くの国家の内部の民族相互の秩序は、ほとんど萌芽の域を超えていない。確かに、この国際法および国法的な萌芽を注意深く集め、整理し、秤量することで、一つの驚くべき結果に達する。世界が熱望する新秩序は、今日すでに、空間的および時間的に散らばった個々の法的機関のなかにほぼ完全に示されていて、われわれはもはや、新しいものを見つけ出さねばならないという、気がふさぐような状態をまぬがれている。むしろ大部分のものは、われわれの眼前で生成しているが、気づかれなかっただけである。いまや、われわれの任務は、生成したものを理解し、一般化することである。ここでわれわれが言えることは、他の多くの場合と同様である。新しい秩序は古い秩序が終わるところで示されている。われわれは意識的行為によってそれを解き放つだけである。

ある点では、一般的な先入見に従えば、諸結果は既存の秩序のなかで明瞭である。諸民族は国家に対して対等であり、国家は主権を持つ。一般的な先入見の圧力により、「主権を持つ国民国家の併存という形でしか、世界の秩序は考えられない」という観念は、すべての疑問と異論を押さえ込んでくる。それに対して、われわれの研究があらゆる点で提示していることは、民族主義者の見せかけと騒々しい大騒ぎにもかかわらず、この観念が現実には照応していないこと、基体における諸事実がすでに新秩序を発見していること、この新秩序が国際法および国内法のいたるところでそれを隠している覆いをはね飛ばし、法的生活の表面にほとぼり出ているということである。

われわれはこれらの事実から、われわれが民族的発展の終局にあるのではなく、その途上にあるという認識を得るのである。われわれは頂上にいると思っていた。われわれはそこに到着し、その向こうには別の世界があるのをいぶかりながら見ている。1555年9月25日、記憶すべき「アウグスブルクの宗教和議」が締結されたアウグスブルクの帝国議会で、ドイツ帝国議員たちが、宗教的自由と、臣下をその信仰に改宗させ、転出を強要する権利を、どの領主にも与えた（領土の属する人に、宗教も属す *cujus regio, illius religio*）講和条約により、信仰上の対立は終わった、と誤解したのと同様に。しかし、この宗教和議とヴェストファーレン講和までには1世紀、信仰関係の最終的調整にいたるまでにはさらに2世紀かかるのである。

歴史的な類比は、誤った類比である！ そこで次のような異論が唱えられるであろう。それは協定箇条にかかっている。そのような協定箇条が存在するのか？ この箇条を提示するために、理論的な思索の技巧をこらしすぎた構築物ではなく、1919年の実定法的な厳粛な国際法を検討しよう。

奇妙なことに——われわれはこの奇妙さを際立たせるのだが——、マイノリティ憲章は、まず「人種と言語」、すなわち民族と信仰告白を問題にしている。この対置は、まさに比較史的考察を必要とするものである。精神的存在の二つの非常に異なった側面を同等に扱うことは、どのようにして可能なのだろうか？

われわれは、原始キリスト教とその国教化、中世における公的権力の分裂、二つの剣のもとにあるキリスト教世界の政治的統一の中世的な観念、ローマ的な「普遍」とキリスト教的「エクメーネ」についての概括的な見解を思い出そう。諸民族がこの普遍から解放される歴史的な過程を思い出そう。キリスト教体制の最深部での動揺はこの解放とならんで起こった。宗教改革である。今日、ルターが

ヴィッテンベルク城の教会の扉に掲げたテーゼを読み直すという幻滅的な試みを企てるなら、きっとこの論難書のまったく圧倒的に教義批判的な内容に当惑するであろう。多くの教養ある同時代人の判断では、その内容は単なる「坊主の口論」でしかなかったに違いない。しかしながら、その見なれぬ旗の陰には、目覚めつつある民族意識が登場していた。——聖書の翻訳は多くの民族にとって民族文学を告知するものであった。この旗の陰に、絶対主義の主権国家の、すなわちマキャヴェリやボダンの政治的・法的な発明物の建設にとりかかっていた君主層の最も利己的な権力政策が、隠されていた。英国における王位をめぐる騒乱と革命、フランスにおける宗教戦争、ドイツにおける30年戦争は、宗教・信仰上の争闘という外装に覆われていたが、領主権力と民族的自由をめぐるものであり、聖と俗とをめぐる問題ではなかった。

この時代の初めには、国家と教会は一つのものでなければならぬとか、教会は国家権力の精神的側面だから、同一国家体制のなかでの宗教的な差異は耐え難い困難をもたらす、という観念があった。そして元来、領土の属する人に宗教も属す (*cujus regio, ejus religio*) という法規が実施されていた。これは、どの国家もある意味で同時に教会国家であり、どの教会も国家教会でなければならぬという理念であった。それは、どの国家も民族国家 (Nationalstaat) であり、どの民族も国家民族 (Staatsnation) でなければならぬという観念が、今日世界を支配しているのと同様である。しかし、ヴェストファーレン講和で示されるこの時代の末期には、信仰を超えた制度としての国家が、その影響力は様々であるが、つねに様々な信仰を包含しているのを見出す。そこでは、国家宗教は許されている他の信仰と同じ信仰告白であり、あるいは有力な宗教は自由な他の信仰告白と同じ信仰告白である。あるいはすべての信仰告白は平等である。およそ150年が経つうちに、事態は転換し、例えば、ティリのもとで、唯一のカトリックの信仰告白のために闘ったバイエルンは、ナポレオンの手からプロテスタントの辺境伯領であるアンツバハとバイロイトとを、平和裡に穏やかに受け取り、国家に併合した。その後まもなく、「寛容」が、信仰告白の問題について、すべての国の法的な基本見解となり (1781年のオーストリア、1847年のプロイセンの信仰寛容の布告)、立憲時代には、宗教的自由が個人の不可欠の基本権として憲法に記された。

歴史的な関連で見れば、信仰に関する限り、憲法は民族を超えた効力と法的力をもつ信仰寛容布告をもたらす。しかしながら、憲法は——法律家にとってあきれることなのだが——、全く同じ言い回しで諸民族集団 (Nationalitäten) に同時にこの布告をもたらす！ この成り行きは、歴史的な合法化過程において、民族が信仰と同様な運命を経験するとか、国内外の法律に組み込まれ、信仰と同様に政治闘争の外におかれる、というような矛盾をもたせるものではないのか？ 憲法のこの成り行きは、民族の完全で全面的なこの合法化なしには闘争の回避は決してできない、という確信を堅固にするものではないのか？

しかし、次のような異論が唱えられるかもしれない。国家というものはキリスト教徒であることにとってそれほど本質的なことではない。——だが、われわれが述べたように、民族にとってはまさしくそうなのである！ 民族は、国家となって、あるいは最低限、連邦国家の構成国となって完成する。しかし教会は、原始キリスト教時代には、国家全体の外部に、ある程度までその上方にあったし、中世でも国家と完全に一体であったのではない。教会は国家と分離可能であるが、民族はそうで

はない。

この異論は、今日の国家観念——主権の一体性と不可分性——を、中世の共同社会に移したものである。それは、すでに上述したので繰り返す必要のない、全く性質の異なったものである。しかし、ある点ではそれは正しい。民族を国家に組み込むことは、コンスタンチヌス帝のもとで着手された教会の国家化とは全く違った性質のものであり、民族の脱国家化は、教会と国家の分離と同じ意味では決して考えられない。だから、ここには比較のポイントはない。

さて、民族的発展の来し方行く末について総括的な判断をする場合に問題となるポイントを提示すべきときである。

国家的絶対主義と民族的絶対主義

人間のもとで生成し永続するどの共同体も、共同行為の機関として現われないあいだは、他者の支配と搾取の物言わぬ対象の単なる基体にとどまる。その後、それは活動の単位として歴史に登場する。共同体が法人となり、その力が他のすべての同種の単位と区別されると、はじめて持続的かつ恒常的に活動することができる。法にとっては、自然人に対する自然人が、権利をもつ個人であるのと同様、共同体に対する共同体は、公法のおよび私法的権利をもつ法的人格である。これ以後、憲法的に合法化された共同体は、独立した固有の生命をもち、成長し、繁殖し、衰え、個々の人間のように死に絶える。それは、同じ自己保存法則のもとにある。法的生活においては、自己維持と呼ぶよりも自己保存と呼ぶ方がよい。そこには、成員の数および社会的実行機能についての成長・拡大の衝動——法的には「傾向」と呼ぶべき——もある。大衆を考慮にいれた、包括的な目的イメージ（観念）をもったどの共同体も、その機能を拡大し、すべての人間的共同生活を、可能なかぎり取り込もうとする傾向がある。より小さな規模では、どの熱狂的な軍国主義者も、全国民を軍国主義的に教育しようと努め、確信ある哲学者は全国民をその学派に転向させようとする、等々。こうしてキリスト教とイスラム教の宗教運動は、全国家体制を吸収するまでに拡大した。すでに見たように、民族共同体は徐々に全国家を食い尽くし、無産階級は他の全階級の廃棄と全民族の融合により単なる人類になるよう努める。すべての共同体機能を唯一の機関でおこなうような共同体のこの理想像を、絶対的共同体と呼ぼう。絶対的共同体の理想は、これまでほとんど現実になっていない。せいぜい種族の遺伝共同体や血統共同体が公的生活全体を規定するような貴族体制の時代のものである。その最近の残滓は、今日では非常に狭くなった家族的結合であり、その最近のイデオロギー的残滓は血縁神話である。

すべての共同体が拡大の傾向を持つので、大衆を含む大きな共同体は絶対化の傾向を持ち、そのために闘い、互いに論争し、例えば国家と境界の闘争のように、歴史の大部分を占めている闘争を互いにおこなう。

これらの闘争の基礎は、物質的な共同体基体のなかにあるが、基体の諸連関は法の諸連関に転換する。組織が問題であるので、法の諸連関は機関の諸連関である。基体のなかで生ずる経済的・物質的な闘争は、例えば、中世の教皇と皇帝のあいだの闘争、1789年の王と国民議会との闘争のように、諸機関のあいだの闘争としてしか現われない。また、人間の宗教的な使命と世俗的な使命のあいだの闘

争、領主主権と民族（国民）主権のあいだの闘争のように、理念のあいだの闘争としてしか現われな
ない。これらは、経済的な諸関係の基礎の上で、精神的な世界がどのように造られるかという問題の解
明に付随するものにすぎない。その媒介項についての探求が期待されている。

いまや近代国家は、絶対的国家として歴史に登場する。しかしこれは、絶対的支配者がそれを支配
している（領主主権）という意味だけではなく、絶対的な共同体であるべきだという要求をも伴っ
ているのである。侯国は、その始まりに、レーエン法によって生きる貴族に出くわす。——レーエン法
は、全ヨーロッパで、あらゆる諸国を通じほとんど同じ法である。貴族は聖職者に出くわすが、彼ら
は、教会法によって生き、最高の裁判所を国境の向こうの教皇としている。ローマ法の受容が西欧の
大部分で承認されて以後、都市市民は、すべてのこれらの国家体制に行き渡っているユスティニアヌ
ス法典の注釈から演繹される法律によって、その仕事を済ましていた。しかし、領主は彼に従う人間
たちを絶対的に支配しようとし、立法をわがものとし、神（神法）、教皇（教会法）、ローマ皇帝
（ローマ法）、聖化された「習慣」（慣習法）を取り除き、自らを立法者、すなわちすべての法の唯一
の源であると言明する。かくして彼は、彼の臣下を他の支配者の臣下と結びつけているどのような絆
をも断ち切り、外国の団体と国内の団体のどのような連絡も重罰で禁止し、従属と支配とを絶対的な
ものとするために、大逆条項や反逆条項をつくった。

人も知るように、絶対主義は領主の人格のなかにではなく、人間の他のすべての結びつきに対する
絶対的で専一的な暴力の僭取のなかにある。ベネチア貴族共和国は、ルイ14世と同様に絶対的に支配
した。

民族（国民）主権を宣伝したフランス革命そのものが、同時に人間の諸権利によって、国家権力を
制限したことは興味深い。「宗教的信条は自由である」、「学問と学説は自由である」等々の命題は、
国家がもはや人間のすべての共同体機能を支配しているのではないことを語っている。教会と国家の
分離は、固有の機関を持つ教会共同体が、事実上だけでなく、法的にも、あらゆる国家の彼岸に存在
しうるということを語っている。学問と学説の自由は、人間の精神的共同体が、あらゆる国境を越え
て保持されるべきで、国家はそこに介入する権限を持たないということを語っている。人間の諸権利
が語っているのは、国家が絶対的な団体ではなく、相対的なもので、特定の目的によって制限される
もので、他の諸団体と並んで存在しうるものでしかないということである。そして、自由主義的教義
は、国家は生命・自由・所有を保護する団体であり、さらに人間を平穏に保護しておくべきだとい
うところまで拡張する。

民族が公的な権力を手に入れた瞬間、この問題に立ち向かわねばならない。人間のすべての共同
体的存在が民族のなかに包含されていると考えている民族主義者は、絶対主義の由緒正しい継承者であ
ることがただちに証明される。職業と階級はあらゆる国境を越えて相等しい利害を持ち、学者の学
派、芸術家の流派、宗派、教会等々が人間のあいだに諸共同体をつくるのを、民族主義者も見ては
いるのだろうが、しかし彼はそれに同意しようとしない。彼にとっては一つの共同体だけが、すなわち
民族共同体だけが絶対的なのである。彼にとっては、どの他民族も異人であり、敵でしかない。他
民族と持続的なつながりを持つのは、不道徳で、民族的な裏切りなのである。他方、同じ民族の成員の
内部に精神的・社会的な対立が存在し、それゆえその表現を見出すに違いないということを強調する

だけでも、民族主義者にとっては重大犯罪であり、民族を引き裂くものである。共同体のこの絶対性が主権から厳格に導かれるところに、彼のこだわりがある。

だが今日では、この絶対性はフィクションにすぎない。世界の学者や芸術家は、——どの個人も、純粹であるほど、より鋭く民族文化の刻印を帯びるとはいえ——民族を超えた国際的な単一の精神共同体をとうにつくっている。自分の腕ではなく、国家の恩寵によって免許を得ている特権的ツフト親方だけが、この共同体を拒否している。すべての身分、職業、階級は同様に国際的な共同体であり、国際的な連合の数を明らかにすることは今日では難しい。国家を越えた共同体の非常に濃密なネットは、国境と言語境界が切り離そうとするものを調停し、結びつける。主権の立場からは、このすべての共同体は、考えうる事実的・法的な基礎を全く欠いているように見える。国家的な主権および民族的絶対性は、国境を越える「団体結成禁止」にしがみつかなばならぬのであろう。われわれがこれらの現象をどのように特徴づけたとしても、事実の国際的なものは、民族的なもの、それゆえ民族国家あるいは部分国家を、他の団体と同様の単なる相対的な一団体にする。国家や民族（国民）の主権についての教義は、すでに事実によって反駁されている。時代にそぐわないドグマを告げるものである。

ナポレオンの講和条約締結、とくにリュネヴィルの講和の後、1803年2月25日の帝国代表者委員会決定は、ドイツ人の土地の一連の絶対的主権を取り消した。すなわちその支配者と領域とをあっさりとより大きな国家体制に従属させ、当時の言い方で言えば、併合した。この表現を使おう。多民族国家は、編入された諸民族を併合し、彼らを民族を超えた団体に従属させる。——しかしそれは国家的な諸機能を諸民族にゆだね、保証する。われわれが他の場所で要求した総連盟は、今日の民族国家を併合するが、国家としての地位、人間共同体の構成国家や部分国家としての地位のままにしておく。世界のこの新しい法秩序は、民族的団体の相対性を法的なものにし、誰にも目に見えるものにする。しかし、民族的団体はその国家的な性格を失わない。

だから共同体の相対性は、教会と民族（国民）との疑う余地のない類似点でもある。しかしそれとともに、特殊な違いがある。とりわけ内なる精神に向けられた信仰告白は、教会と国家との分離によって、国家の外に置かれ、信条の自由と公然の礼拝の保証に関してのみ国家の保証を必要とする。——しかし言語共同体としての民族は、人間の意志疎通の外的な手段、すなわち言語、文献、印刷物の共同体である。国家は（人権宣言以来の）法と同様に、外的な人間をとらえるだけである。しかし言語は人間の外的結合であるので、国家はこの手段に結びつき、他方で言語は国家に結びつく。だから次のように言える。教会や他の無数の共同体を国家の外に置くことができるなら、構成国家や部分国家の形で、人間のより高度な共同体に、民族を編入することもできる。国家と民族（国民）との完全な崩壊は、人間の将来にとっては、ほとんど予見することもできないし、想像することもできない。

ナショナリズムの転回点

これまで閉じられていたキリスト教世界への諸民族の侵入が作りだした深い裂け目は、プロテス

タンティズムによるキリスト教意識の非常な動揺をひき起こし、同時にこちらでは宗教的な分裂と無関心を、あちらでは宗教意識の過度な高揚とを生じさせた。理念上のどのような危機も、当該の理念世界の解体と誇張とを相並んで同時にもたらす。

世界戦争はナショナリズムの歴史的転回点であった。

それまでは、ナショナリズムは、他のすべての政治的思考を圧倒する、唯一の支配的な精神的志向であった。

それまでは、戦争は人間の力の最高の表現であった。職業軍人はほとんどの国で最高の社会的地位にある英雄であった。

それまでは、「血と鉄」は、歴史の、とりわけ民族の上昇の唯一有効な、あるいは少なくとも決定的な原動力であった。

それまでは、国家すなわち民族国家は、すべての法の源泉であり担い手であった。それ以外には強制的な権力はなかった。国家は無謬であり、それに対する反論はなかった。

それまでは、戦争したり、弱者を服属させる国家の権能、すなわち掠奪の権利は、争う余地のないものであった。戦闘は神の審判のごとくに決定する。勝者は正しい。強者であることが証明されたのだから。弱者に対して正義がおこなわれるのだ。

当時すでにそのイデオロギーに反対していた二つの敵対者、平和運動と社会民主主義は、ユートピア的であり、軽蔑すべきものであった。まさに非常に軽蔑すべきであり、犯罪的なものとされていた。

戦争の開始とともに、民族主義的な倫理学説と英雄伝説、国家無謬の教義と勝者の権利の寓話は崩壊した。パリの講和会議は通例の敵同士の手shakeで諸民族の騎士的な決闘を終わらせることはなかった。勝者は戦争責任のテーゼを掲げ、敗者は有罪だと宣告され、最高の正義とみなされていたことを、人類に対する犯罪とさえ宣言するよう強いられた。

一民族、一国家——それが犯罪者だ！ すべての制定法の起源であり担い手であるべき国家が。敗者は数年間放逐され、諸民族の共同体から排除されたままである。

この転換が完全であるように、列強は、——今度は勝者も敗者も一緒に——ある条約を、すなわち戦争を「不法なもの」だと宣言するブリアン・ケロッグ協定、戦争放棄協定を批准する。ジーガンブラー族への司教の言葉が繰り返される。汝が崇拜するものを焼き、汝が焼いたものを崇拜せよ！

戦争は、この世界で民族が目的を遂行する、最終手段、最高手段であるのか？——否、戦争は、禁じられた、放棄された民族政策の手段である。民族は法廷の前にあり、より上位の何らかの力が、その目的および手段について判決を下し、それについて——強制執行手段はなお欠陥のあるものであるにしても——排斥と禁止とを表明する。

この完全な転換は、すべての民族の民族意識、とりわけ戦争まで民族国家を導いていた階級の民族意識を最深部で揺さぶるに違いない。しかしそれはなお現状に満足しない諸民族をも揺さぶる。彼らはなお、戦争以外に自由と強大への上昇の方法を知らない。そして、戦争直後の麻痺の後に、徐々に反動が現われる。逆に、これらの階級や民族は、民族意識と民族理念の過剰な高揚に陥っている。それは戦争前の排外主義を凌駕している。それ以上である。

民族は、ますます国家と完全に一つに融合すべきで、民族国家は絶対であるべきだといわれる。ファシズムの完全国家は、国家的任務の相対性をすべて否定することに他ならない。教会も、学問も、芸術も、すべては、民族的であるべきで、民族的でだけあるべきで、完全国家に統制されるべきであるといわれる。人権なんていかさまだ！ インターナショナルな信念なんて一掃だ！

統合民族国家を眼のあたりにすれば、公民の基本権、個人の手放せない権利も、邪魔で有害な先入見に過ぎない。統合国家は、個人が権利を持っていることに我慢できない。それは、国民投票、国民代表制、とりわけ政党を我慢することができない。唯一の党派は「民族（国民）」であり、それ以外にどんな党派も許されない！ 国家内部にある非政治的なすべての共同体も、従属的な分枝として国家に奉仕しなければならない。——ファシズムのコルポラチオン理論である。政治的な政党制度は罪深い治安妨害とされ、政党の存在や創設は禁止される。それは民族を分裂させるものであり、犯罪なのである。外国とのどのような連絡も、不審なことであり、国賊的なことであり、事情によっては犯罪的なことである。周知のように、ファシズムの統合理論やコルポラチオン理論は、領主権力の絶対主義を遙かに凌駕する。

ナショナリズムは、戦争の15年前に、帝国主義の理念で満たされていた。世界的名望と世界の支配が、帝国主義的ナショナリズムの目的であった^{〔原註〕}。過剰な自国商品のための販路、民族的資本力と労働力のための全世界市場の開放、とりわけ植民地の獲得が、民族の最高の利益であり、民族の将来の強大と生き残りのための前提だと思われた。「ドイツの未来は水路にある。」

世界戦争においては、すべての民族が厳しい教訓を授けられた。世界経済の全面的な依存を経験したのである。とりわけ中堅国にとって、この教訓は、窮乏、飢餓、疾病、ついには完全な疲労困憊という敗北の主要原因を意味した。インターナショナルは、勝者と敗者の双方に、この事実を目に見えるものにし、感じられるものにした。国民経済的にも、この転回点は、ナショナリズムの動揺と過剰な高揚をもたらした。世界経済会議（1927年）を含めて、すべての国民経済団体が、絶え間なくインターナショナルな経済協力の必要性を強調しているが、驚愕したナショナリズムは、自然経済の絶対的排他性の傾向を頂点にまで押し上げる。アウトルキー妄想は、自己の経済領域の破滅的な閉鎖にまで上りつめ、世界経済を再び数世紀前の状態へと巻き戻すことが出来ると脅し、騒ぎ立てている。この妄想のなかで、民族を他のすべてから区別し、世界から孤立させて、ついには独立で強大なものにしようとして、その意に反して、すべての民族および人類全体の窮乏化をもたらすのである。すべての世界が歓迎した1927年の世界経済会議の提言のうち、一つさえも主権政府によって実現されず、ほとんどすべてに対抗手段が向けられた。主権は世界理性に対する反逆のなかにとどまっているのである。

こうして意識が動揺しているナショナリズムは、古いイメージの世界に固執して、無法な権力の最古のイデオロギーに回帰し、人種戦争に、軍国主義の救済手段に、要するにファシズムに陥る。こうしてそれは、子供たちに軍国主義的思考様式と生活形態を押しつけるのである。かれらは最後の大人種戦争のイメージのなかで成長する。その戦争においては、むき出しの熱狂が確実に勝利するに決まっている。かくして子供たちは、民族を偉大にする精神的な諸力のすべてを、とりわけ真面目な学問と謹厳な労働を軽蔑することを覚えるのであろう。指導者—英雄が勝利の奇跡を成就する！ 民族

は神話となる。それは、最も絶対的な団体を、民族移動の種族集団の中世初期の体制のなかにある軍団編成を、戦車と飛行機を持ったチングス・ハンの軍勢を想像させるものとなる。

このような見解にとっては、近代の民族が、経済活動を営む共同体であり、多くの職業と階級であるという俗物的な記憶は、民族という最も神聖な善に対する、想像される絶対の統一に対する悪意ある攻撃だと思われる。諸階級はまったく排除するよう決められ、それに対するどのような呼びかけも犯罪であり、追放される。それは錯乱であるのだが、それでもやり方はある。

なんとこの対立が時代を引き裂いているのか。時代は戦争を追放し、同時に戦争を賞賛する！ 時代は軍縮を説き、同時に軍備増強という妄想に陥る。時代は諸民族の意志疎通と交流に努力し、同時に諸民族の間に最も深い裂け目をつくる。かくして人類には、別の道は想像しえないものであるようにされる。

従来の百倍も野蛮で破壊的な、大民族にとって没落を意味する世界戦争という野蛮への回帰なのか、それとも文化活動の安全と自由をすべての人に保証する、文明諸民族の法共同体と平和条約共同体の基礎づけ、すなわちインターナショナルの法的基礎づけなのか！

インターナショナルは生成するであろう、それへの道は二つある。万人に対する万人の選抜闘争において、ある民族が他の民族に対する勝者になり、古代のローマの剣が古代のエクメーネのバクス・ローマナを基礎づけたように、世界帝国を基礎づけるか——この道は、破壊された諸都市と荒廃した諸国の灰の山のもとに、人類の自由を葬り去り、諸民族の多様性に富み価値ある固有な文化をすべて消し去ってしまう^[原註2]。あるいは、世界平和が諸民族の自由な連携で基礎づけられ、人間の肉体と精神性の無限に多彩な特色の素晴らしいモザイクで地球表面が覆われる。インターナショナルが生成する。——諸民族は、前の道を行くのか、後の道を行くのか選ぶだけである^[原註3]。

民族主義者が、民族理念の否定とか歴史的な別離であるとして、インターナショナルに逆っているのは不当である。民族主義者は実現の途中まではインターナショナルを押し進めるが、しかしインターナショナルが法的に生まれ、民族が法的構成物として対等なものなかで活動するよう定められる瞬間に、インターナショナルと民族主義者とは離れる。彼らは法秩序のほとんど踏み入れたことのない広野を恐れて、人間以下の生物に特有の生存闘争の野蛮状態へと逃げ戻るからである。それがナショナリズムについての歴史的審判である。

民族の純粋に事実的な文化共同体が法人となり、国家がその道具になるように、民族主義者が闘っている限り、民族主義者は人類を前進させる革命的な勢力である。

民族主義者が、国家となった民族を諸民族のインターナショナルな共同体へ編入するのを拒否し、妨害し、あるいはただ協力するのを好まないだけでも、民族主義者は反動的であり、人類の発展の敵となる。

民主主義的な民族国家の主権が正しい目標となるのは、つぎの場合である。すなわち、民族が王制あるいは寡頭制支配の圧制のもとにある場合、民族が異民族の支配のもとにある場合である。しかし、中世の権力に立ち向かうのではなく、民族の全体的利益に反抗し、世界の平和的秩序と諸民族の確かな共通制度にそむく主権は、経済的、政治的、精神的に、人類の真の敵となる。

そう、主権は敵である！ 今世紀のパラドックスが、先鋭的に表現した命題を述べてみよう。法学

的な考察においては国法的小よび国際法的な主権概念が、現代のすべての論争の焦点である。そして上述のパラドックス、すべての法の源泉であると称する国家そのものが、犯罪者の烙印を押される可能性があり、同時にそれまで最高の、歴史的に最も神聖な手段であるとされていた戦争行為が、「無法なもの」として排斥され、追放されるかもしれず、それまで絶対的であった国法と国際法の言葉である主権が、まさに時代の意識のなかですでに輝きを失っていると主張されている。

主権は敵である！ それは民族間の戦争の再来を、終わることのない世界戦争を、人類全体の毀損と窮乏化を約束する。

主権が崩壊することは民族理念が一緒に滅び埋葬されることだ、と考えている民族主義者は、思い違いをしている。

民族的権利の理念を最後まで首尾一貫して考えてみよう——さしあたりわれわれの想像力で。事実が想像に従う時はそれほど遠くはない。

文明諸民族は、真の完全な共同体、すなわち上述の総連盟を形成する。歴史的境界設定の偶然により、あるいは地理的・経済的な事情の強制により異民族国家に服属しているマイノリティは、その混合国家に秩序正しく関与する。その関与は総連盟の保護のもとにある。今からは、普遍的外人法があるので、世界のどこにおいても、もはや誰も外人ではなくなる。特にドイツ人について語るなら、外国のドイツ人は、地球上のどこでも、故郷にいると同様に保護され、その民族国家の民族的文化事業に参加するのを妨げるものはなく、どこであれ外国にいるドイツ人が経済的・精神的に活動するのを妨げるものはない。もちろん彼は、外国でも故郷でも、同等の権利をもつ他民族の成員の志向に出会う。われわれが今日入り込んだ世界とは違った世界である。

ここでは、二つの理念が一度に実現される。既存の民族的に混合した共同社会および総連盟において、超民族的な国家がえられる。総連盟は、すでに世界戦争以前に個々の思想家によって予見された。それは今日多様な形で必要とされている。ロシア以外のヨーロッパだけについても、1ダース以上の連合計画が研究され^{〔原註4〕}、汎ヨーロッパがよく知られたスローガンとなっている。この提案だけでも、すでに民族国家が、その最大のものでも、今日の経済手段の力と西欧文明の任務にとって狭すぎるものになったことを証明している。——現れ出ようとする新しい世界は、同時に別の理念をも実現している超国家的民族共同体の理念である！ 有機的で恒常的な国際法によってその欲求を限定されているが、保証されてもいる各民族の成員のすべての確実な交流が、文化的な協働を可能にし、それによってまったく平和裡に地球全体に移住し、諸民族が植民地戦争を免れることが出来るような、真の移動の自由を可能にする。超民族的な国家と超国家的民族共同体は、軍事的・経済的な戦争の脅威から、すなわち今日の世界の混沌から、われわれを救い出す法的な制度である。

しかし、この世界は、なお人間にふさわしい世界だろうか？ われわれは、科学と経済によって、精神的・物理的に陸と海を架橋し、宇宙空間さえ研究者の眼で測量する「人間」という最高の存在に到達したのだろうか？ そしてその幸福な完成の後に、下等生物にふさわしい敵対的な隔離の段階に、すなわちその巢が全く環境に対する個体の防御の法則に服しているワニや甲殻類の段階にもどるのだろうか？ 民族的ファシズムのイデオロギーは、唯一のディレンマに突き当たる。——すなわち、最強の者が生き残るまで西洋の諸民族が引き裂き合い、強者だけが文化事業を引き受けるのか、

あるいは諸民族がそれぞれ自給自足に後退し、本当に亀のような生活形態に満足するのだからである。

それにもかかわらず、——安全にのみ留意したこのような存在は本当に安全なのか？ フランス国民は、まさにこの安全志向の甲冑で身を固めている。——まさに最大の声で安全を叫んでいる！ だが武器のもとでの安全がどこにあるだろうか？ 航空編隊が他に先んずる数分の偶然が、首都や文化都市を瓦礫と死体の野に変えるかもしれないのに、武器のもとでの安全がどこにあるのだろうか？ 今日の戦争技術においては、法秩序が与える安全以外にもはや真の安全はどこにもない、というのが真実である^{〔原註5〕}。

主権はすべてのものにとって、強者にとってさえ敵になっている。——本当に打ち立てるべき唯一の主権とは、文明化した諸民族の総連盟の主権だけである！

この事実直面して、民族理念はその核心において変化する。それは民族が国家になる瞬間にその実現の手段を変えなければならない。暴力に代えて法を用いなければならないのである。民族的自由、民族的安全、民族の経済的・精神的発展の無限の可能性は、民族的崇拜によっては、保障されずに、毀損される。今や本当に民族的であるのは、インターナショナルをつくることである！

かくして、社会主義諸政党と世界の労働者階級は、民族ファシズムの狂暴な過熱に心配し困惑して民族的問題を回避する理由はないし、民族主義的な情熱の波を臆病に堪え忍ぶ理由もない。彼らが学び、行動の基準とすべきことは、真に民族的であることは、インターナショナルであるということである。

それによって民族が継承した文化財は放棄されることはなく、保持される。ジョレスが語った印象深い言葉を用いるなら、諸民族は人間文化の宝箱である。われわれインターナショナルもこの宝箱を瞳のように護りたい。だが、誰もがそれを自分のために秘匿して、強者や幸運な者の強奪にまかせたのでは、護ることはできない。われわれはすべての宝箱を一つの金庫に集めて、各人が自分のために自分の宝箱の管理をし、共同の金庫は共同で護りたいものである。かくして、

人類はインターナショナルなものとなるであろう！

諸民族の物質的存在

われわれは、われわれの時代を苦しめた巨大な不可解と矛盾を提起して、発展の道と目標を押し量ろうとした。もちろん懐疑的な人は多くの兆候を曖昧だとみなし、多くの結論を性急で大胆すぎるものとみなすであろう。だが彼は次のように考えるべきであろう。新しいものは、突然太陽が光り輝いて地平線のうえにのぼるようには、この世界にやってこない。むしろそれは気づかれることなくわれわれの足下に芽生え、目立たないうちに成長する。気づかれたときに、それが出くわす最初のものは、騒々しい抗議と憤激した抵抗である。どんな改革でも、無思慮で無関心な多数の人々は、新しいものの主張に反対し、新しいものの出現に抵抗する。

まさに今日、反対が最も声高になり、反抗が最も激しくなっているのは疑いない。まさに今日、インターナショナルな思想の勝利を主張するのは、ユートピア的であるだけでなく、ほとんど笑うべきことであるようにみえる。皇帝たちによるキリスト教迫害の絶頂期に、福音の間近な到来を予言する

のと同じくらい、馬鹿げたことかもしれない。

しかしながら、将来のことを予見したからといって、抵抗勢力を認識し測定するという任務がなくなるわけではない。それは容易な任務ではない。圧倒的に嘲笑し、民主主義、議会主義、平和理念を拒絶することを山師的に正当化し、わめき立てる支持者を得ている過去の使者に会うだけかも知れない。生まれ出ようとするものの明らかな困難を、彼らは、大胆な歪曲のために悪用する。彼らは、発展の未成熟な前触れを、時代遅れのシステム、わけても1789年のシステムの死にかけの残滓だと判断する。寛大にもこのシステムの過去に暫定的承認を与えて、現代にとってはそれは片づいたことであると説明し、完全に新しいシステムに席を空けるよう判決を下す。しかし、それがわれわれにもたらすと称する新しいもの、すなわちそれが誇示する国家は、歴史のくず箱からとりだされた、着古して、古くさく、すり切れた晴れ着である。絶対的国家権力という古い理念が、「ヒューラー制」とか「全体国家」と呼ばれ、古い身分的な見かけ倒しが、シュテンデ的な社会秩序と呼ばれる。封建的な制度の複製は、新しいヒエラルキーに形を変えている。チンギス・ハンの軍勢の理想は、「血と土地」、「ヒューラーと従者」というスローガンのなかで、家臣の忠誠と領主国家についての中世的イメージで描かれる。過ぎ去ったイデオロギーのこのような合同仮装行列が、新しい国家体制および社会体制と呼ばれるのだ！

しかしながら、ファシズムが、どの変種をとっても、反動であり、反動に過ぎないということは、容易に示すことができる。より困難でかつ重要なのは、この精神的に全くみじめなものが、目下の歴史的局面ではしばしば勝利し、ときどき成功するということがなぜありうるのか、ということを解明することである。

この成功には、彼らが学派をなし、個々の場合には、天才の印象を与えることは入らない。彼らは反動的なものすべてをそのまわりに集めて、最も高価な衣装——あちらにはローマ帝国、こちらにはドイツ中世——および過去数世紀の精神的な業績および質屋の古着がその意のままになるので、その旗手を目もくらむほど飾り立てることができる。彼らはまた、アメリカ大統領の簡素な黒い背広をモール付きの制服に替えることを必要とした。しかし新しいものは、いつもたいていは失業思想家とその戦闘員をもったにすぎない。説明が必要なのは、この反動の実際の結果である。一時的にでも勝つためには、ともかくもその時に正当性をもたねばならない。

その弁解の一部はすでに知られている。——国際連盟の制度の故障がそれである。その理由も知られている。それは機関の不十分性にある。それは世界のすべて国民の連盟ではなく、最重要な諸国民の連盟でさえない。それは諸民族の真の連盟でなく、国家政府の総括にすぎなかった。それは、その決議が尊重されるほどの権力をもった国際連盟ではなかった。だからそれは、もっぱら道徳的な権威にすぎなかった。しかし2構成国が他の構成国を打ち負かすために、完全にあるいは一時的に脱退した（日本とイタリア）。また1構成国が国際法上の義務を無効とするために、加入後すぐに脱退した。——3国がすべて無罪で、後でその獲物を確実に所有したがゆえに、他のどの国家も、今日も国際連盟が、戦争と敗北から、場合によっては絶滅から自分を保護してくれることはないということを確認しているにちがいない。だから、どの国家も自己擁護について自衛と自力救済を考える以外のことはできない。

法も、裁判官も、執行権もなく、突然敵のまっただ中に自分がいるという、個人がもっとも不確実な状態に後戻りすることこそ、世界の全般的混乱の主要原因であり、ファシストが引き合いに出す重要な論拠である。それが間違いだというのは、彼らこそが、この状態をつねに望んで、意識的にジュネーヴに反対してそれを引き起こしているからである。

それにもかかわらず、法のこの拒絶が主要根拠ではない。戦後の世界の経済的な発展がそれである。われわれは、絡み合っているので繰り返しが避けられないところを、補足的に駆け足で説明した。

戦前の経済は——制限されたものではあるが——労働力、商品、資本の交通の自由のもとで、経済領域間あるいは国家間の自然な、すなわち経済的制約だけに服する分業を形成した。分業は労働の再結合なしには不可能である。それは、自由な労働の場を求める人間の、開かれた市場を求める商品の、儲けの機会を求める資本の、妨げられることのない移動である自由な交通に配慮する。この発展は誰にとっても祝福豊かなものであり、西洋に世界の工場の役割を保障するものである。

それはまた経済領域の天与の多様性を調停する。民族国家は地球の一部を支配し経済的に利用することである。以前の移住と歴史的な定住、軍事的な掠奪あるいは文化的な浸透は、地球を諸民族に分割した。このように獲得され、無数の講和条約締結により確定された、一民族の手に与えられた土地は、生産性と豊かさに差がある。技術進歩は痩せた土地を突然肥沃にし（鉄、石炭、石油）、世界交通の変化は荒涼とした地帯を最重要地にする（スエズ）。この点については、まだ叶えられていない将来の可能性が開けている。極地の氷原と赤道直下の砂漠は、温かな地方に埋蔵された金属と燃料を使い果たしてしまえば、エネルギー源として量り知れないほどの意義を持ち得る。かくして私経済での地代現象は、最高の土地所有者としての諸民族によって世界規模で繰り返される！そして地代を産出する事情はつねに将来に移動し、土地を所有する民族はある時は恵まれある時は軽視されるので、ファシストは次のように結論する。戦争だ。餌場をめぐる、陽の当たる場をめぐる戦争だ。——われわれは、私経済から出てくるこのような主張、私闘を好む封建領主の思考様式を知っている。そして、ブルジョア法がそれを克服し、片付けたことを知っている。

現在、主要問題は二つの部分問題の形で現われている。人口過剰な諸民族の働き口と諸民族の原材料の取り分である。法的に整備されたインターナショナルは、地球の埋蔵物を、すべての国民、すべての独創的な頭脳と勤労貧民にアクセスできるものにする。交通の自由はすでにこれを途中まで可能にした。そして今日の状況でも、暫定的な取り決めが可能であり、熟考されている。

交通の自由は、おおむね平等に整序されている多様な西洋諸国を並置した。当時すでに債権国と債務国、裕福な国と貧しい国があったとはいえ、その違いは、経済問題での民主主義的な共存を排除するほどには大きくなかった。

1914年から1918年までの戦争、その量り知れない経済的犠牲、破壊、戦争が惹き起こした、一方での労働の停止と、他方での労働の浪費、膨大な戦債と戦争賠償金は、この共存を完全に破壊し、あるいは少なくとも対等さを破壊した。債権者と債務者、富者と貧者、資本家とプロレタリアは、もはや互いに個人としてではなく、国家として相対している。国家間の争闘が、階級対立の鋭さを持つ！ムッソリーニがイタリアとイギリスの関係を表すのに用いたプロレタリア国家という言葉は、この具

体的な状況では確かに誇張であるが、戦後経済の基本的傾向の一つには妥当する。いまや、プロレタリア化に対する本能的な恐れ、憎悪に満ちた驚愕のなかで、プロレタリアートの指導部の首をはね、国民を資本家に戻して、プロレタリアートを廃絶する、と約束する奇跡の実行者に追隨する諸国民がいる。——ドイツを見よ！

この経済的な転換こそ、国際連盟の本来の欠陥を致命的なものにしたのである。あまり恵まれない諸民族は、国際連盟を彼らの物質的欠乏を取り除く道具だとみなさない。勝者の独裁というその生来の欠陥のゆえに、国際連盟は、——全会一致規定に縛られて——非常に限られた範囲でしか、新しい種類の権利を基礎づけることができなかつた。かくして結局は、満腹者のテーブルについたのは少数だけで、そこのパンくずは飢えた者には少なすぎたのである。

原料資源および天然資源のある地域は、諸民族に非常に不平等に配分されている。そしてナショナリズムはこの不平等から二つの処方箋を引き出す。一方では、恵まれた満腹者と強者が弱者を屈服させ、組み込むというものである。——結局はそれが彼らにとっての利益だというのだ。他方、不利な飢餓者と強者が強者に立ち向かい、それと闘って、それと同等となり、あるいはそれを凌駕しようとさえする。それまでの人類史は、両方の処方箋について証明されている (*probatum est*)。ローマは当時知られていた全世界を掠奪した。しばしば貧しく小さな遊牧諸民族が大きな文化的諸民族を打ち負かし、奴隷化した。最後の勝利を勝ち取ったのは、よく組織された、英雄的な諸民族であるというのだ。

いつも飢餓者と弱者は、民族的エートスの高揚によって資源と力の欠乏を償おうとする。民族に固有の英雄性、身についた規律、それは勝利の奇跡をもたらすフューラーへの盲目的献身である。かくしてフューラー個人こそが「奇跡」の賜物であり、奇跡そのものである。——フューラーを疑うことは犯罪である。だから、この規律そのものが奇跡の説明しがたい賜物であり、血の奇跡なのである。——奇跡をもたらす血を否認したり侮辱するものに、災いあれ。経済活動以外から収入を受け取る知識階級のヒエラルキーは、この奇跡信仰の犠牲になりやすい。

経済に通じた者が知るところは、今日の戦争が英雄が活躍できるようなものではなく、技術的なものであること、それは工業的・資本主義的な事業であり、そこでは機械的な装置が個人の英雄行為を脇役にしてしまうということである。協商諸国の家畜と穀物、鉄鋼と燃料資源は、結局は涸渇した同盟諸国を打ち負かした。民主主義諸国の規律は、軍事君主国よりも小さくないということも明白に確証された。民主主義の理念が君主主義の理念よりも強力であることも明らかにされた。アビシニアの最近の破局の後には、チングス・ハンの時代が過ぎ去っていることに、もはや疑いは許されない。貧者と弱者は、もはや奇跡を望むことはできない。

経済に通じた者が世界戦争の諸結果とその後の植民地経験から学んだことは、戦争の遂行と掠奪の実行が、もはや強者にとっても割に合わないということである。歴史なき諸民族の目覚めという法則は、異民族を支配できないようにし、すくなくともその支配は利益よりも犠牲の方を多くする。奴隷労働を儲からないものにした技術進歩こそが、ますます諸民族の奴隷化を利益のないものにする。エジプトに対する英国の賢明な態度は、英国の政治家がこの洞察に従うことを習得していることを示している。新しい世界は、そのすべての基礎において、12, 17, 18世紀のそれとは異なっている。

地表の測量と分配は、将来の世紀には、別の手段で別の目的のためにおこなわれる。国際的な条約と規則が、戦争と勝利に取って代わる^[原註6]。戦争と勝利が世界の諸問題を解決しないことは、1914年から1919年の悲劇的な年月に証明された。

パリ講和条約は、一連の新しい国家を、古い諸国家と並べて置いた。多くは小国家であり、ヨーロッパと西南アジアでは、民族別の居住が要求され、どの民族も地表の一部を独占的に利用することが要求された。しかし言語境界はめったに経済的境界と一致していない。政治的主権も経済的アウタルキーを伴うものではない。数百年の経済と交通の連関を無思慮に破壊し、保護地域の諸都市、後背地の港湾都市、ターミナルステーションの鉄道ルートを掠奪し、とりわけドナウ君主国の非常によく組織された閉じられた経済領域、すなわち今日しばしば言及されるドナウ地域を、経済的に無意味に細分化してしまった。その際、三つの新国家、オーストリア、ハンガリー、チェコスロヴァキアは海への直接のアクセスを失った。法による経済のこの抑圧を度外視しても、経済的なつながりに顧慮することなく、こんなに多くの小国家をつくるのが、将来の発展にとって重大な不都合をもたらさないかどうか、問題となる。

とりえず質的な違いを度外視すれば、とりわけ単なる広がり、国家領域の空間的広さが、それを利用するのに、重要な影響力をもつ。技術水準、すなわち近代的経済手段の射程は、広い経済領域を必要とする。すでに世界戦争以前にそうであり、そして今日では一層そうである。世界経済の流れのなかで、小国は溺れるのをおそれ、可能な限り高い堤防、すなわち関税や禁止によって、商品、労働力、資本の流れに抵抗する。大国（合衆国や英国）でさえ、多数の小国や弱国が国境に打ちつける労働力の流れによって、洪水がおこるのを防ぐ必要がある。連絡手段、不可欠な交通の自由が妨げられれば、世界経済は総じて停滞する。国境は誰にとっても進歩の障害物であることがますますはっきりする。

大陸の古い分業は、すでに世界戦争によって本質的に乱されている。ヨーロッパがすべての成人を塹壕のなかにほうり込んだので、植民地は工場そのものをつくろうと考えねばならなかった。——植民地生産物の飛ぶような売れ行きのため、必要な資本はヨーロッパから他の地域へと移動した。戦争によって、新しい移動がおこる。人間ではなく、商品ではなく、工業が移動するのだ！

しかし、すでに戦時および戦争直後に、特にロシアの第1次5カ年計画によって、以前にはほとんど考えられないと思われたことが可能であることが証明された。国家が必要な犠牲を市民に押しつけ、国境をしっかりと閉じておくことを望み、かつそれができるなら、2・3年のうちに、ほとんどの国でも、国家のイニシアティブにより、どのような工業も即座につくりだすことができる。新開国においては、工場の煙突がぐんぐん伸び、古いヨーロッパでは、煙突が冷え込む。

古い工業国の世界を包括する独占はもろくなり、工業化は全世界で戦前よりもずっと急速に広がっている。どの民族（国民）も、ようやく握った国家権力を強力に利用し、新しい工業を出来る限り急速かつ完全に、その経済領域に据え付けたいと思う。植民地は母国に対抗して同じことを企てる。

戦争と戦後の時期、ヨーロッパ以外の諸国で生み出された原材料や食料品が、むさぼるように引き寄せられた。しかし元々の土地耕作者が塹壕から帰って来て、彼らはまた同胞市民に供給しようとする。彼らはもはや世界市場価格ではやっていけない。新開国の土地生産物（コーヒー、甘蔗糖、穀

物、等々)が途方もなく圧倒的なものになっていて、古いヨーロッパ全体は、もはやその食糧を、経済的なやり方では生産することができない。国家は援助しなければならぬ！ 国家は、経済的にはもはや是認できない高価格、関税障壁による政治価格を保障する。国家は工業・農業生産物の高価格を、同時に国民に押しつける。この高価格はどこから支払われ、一体いつまで支払うことができるのだろうか？ それはどこからも来ない。諸民族は、それまでの蓄えの残りを少しずつ食いつぶさなければならぬ。自己保存のためには、西洋は、新しい道を進まなければならない。

しかし国家は、援助し、保護し、介入し、整序し、経済活動をさえる。国家によるこの経済への浸透、経済の国家化の進展について、私は1917年に詳細に予測した^[原註7]。それは、われわれの世界の最も根本的な事実の一つになっている。それが有無を言わず公権力に要請するのは、戦争以前よりも、はるかに強力に、印象深く、素早く行動し、はるかに広い任務を遂行し、はるかに大きな危険を防止しなければならない、ということである。このような国家権力に対して、すべてが、労働者階級も、半世代まえとは全く違った立場を取らねばならない。

しかし、1918年以来の発展総体は、次のように特徴づけることができる。世界経済は、すべての大陸、地表の全体を巻き込み、ますます固く絡み合っている。同時に、すべての民族は、その民族経済を世界経済による洪水から護り、その分け前の増大を勝ち取ろうと努めている。世界経済と民族経済は、弁証法的な対立のなかで、互いに闘っている。民族の主要な闘争手段は国家である。

私は、上述したところで、われわれが1918年に入り込んだ時代、私が予示した時代を、国家経済の時代と呼び、そのように記述した。国家経済という概念は、この意味で、一方では計画経済という概念よりも包括的であり、他方では国家社会主義という概念よりも狭い。それは経済振興のすべての手段を含み、個々の経済部門の国家的計画だけでなく、私的な計画も含んでいる。それは、すべての経済部門の直接的な社会化ではない。それは、公的徴用や国家的自己経済を絶対に必要とするものではなく、経済的最適条件が要求するかぎり、いたるところへ介入する国権にすべての経済要因を服属させることである。

合衆国のニューディールにおいては、経済へのこの国家浸透は純粹である。それは、独裁的な功名心の伴奏も、政治システムの教条主義もなしに、純粹に経験的なやり方で、成し遂げられている。

西洋の諸国家を見渡すと、独特な諸事実が明らかになる。経済的發展は、ほとんど至るところに、さまざまな形態とタイプで出現する。ロシアでは、プロレタリア独裁という形態と国家資本主義というタイプで、合衆国では、強力な民主主義という形態と経験的にそのときどきに必要な経済計画のタイプで、フランスとイギリスでは、既存のものゝ穏やかで有機的な補整で、しかしイタリアとドイツでは、強制的で暴力的な反動のなかで、国家資本主義ファシズムによる、法治国家時代のすべての成果の破壊によって出現する。

時代が経済を形成する強力な国家権力を必要とするということも真実である。だが、法治国家システムに基礎を置く民主主義的な国民ではそれは出来ないというのは偽りである。ユダヤ人を国民(Nation)から排斥することで、諸民族の登場以来、至るところで誠実に協働し、その隆盛に非常に功のあった、憲法の原則によって確実な居住を約束されている民族部分(Volksteil)に対する野蛮な法毀損行為によって、政治的統一が成し遂げられる、というのも偽りである。ちなみに、それは、ユ

ダヤ人と競合する極小部分の国民に当座の利益をもたらすが、国民全体にはただ損害と不名誉をもたらすだけの方策である。強力な実行能力のある国家権力を手に入れるために、それを「全体主義的」にし、公民としての自由をすべて廃棄し、国民を血縁集団の精神的な基準に巻き戻さなければならぬ、というのは偽りである。小市民的な精神は、今日のどの民族にも存在する階級対立、経済的・文化的な利益および理念の対立によって脅かされ、自由な討論、普遍的妥当性をめぐる争いを恐れる。演説や出版による法的な討論を基礎として、投票や決議によっておこなわれるかぎり、闘争こそが、一民族を若々しく前途洋々にしておくのである。そのような決定だけが、納得のゆく、平和を保証する法的な力をもたす。すべての独裁は暴力行使である。戦争はまた戦争を、不正は新たな不正を生む。独裁のこの循環は、双方の国民にとって、災難となっている。——他国民がそこから教訓を得ることを祈る。

ドイツにおける血神話、イタリアにおけるローマ帝国の継承という神話、あるいは他の歴史的・非歴史的な伝説であろうと、それが救いをもたらす唯一のドグマになるなら、また、そのドグマを信じない者、フューラー崇拜に膝を屈しない者、これらの新しそうな民族的な装いで、実際には中世的・モンゴルの国家形態に忠誠を誓わない者すべてを、癩病やみのように強制収容所にほうり込み、異端者のように禁止判決を下し、殺してしまうなら、この虚偽は、人間の良心への挑戦である。

民族虐殺や市民虐殺をしなければ解決できないような、民主主義的に自己統治している国民が合法的な主人になることのできないような、経済的あるいは社会的問題、民族を越えたあるいは民族内部の問題というものには存在しない。もちろん迷信、神話、不法な権力の崇拜は、衛生学が闘わねばならない多くのばい菌と同様、今日なお人類のあいだに力をもつ諸力である。しかし、未来は理性と法と自由のものである。

原 注

- [1] ほぼ10年ごとに変わる民族理念の内容については、Marxismus, Krieg und Internationale, Seite 139 ff. を参照。
- [2] 世界史はこのような成り行きをすでに一度経験している。Marxismus, Krieg und Internationale, Seite, 276ff. を参照。
- [3] 社会民主主義は、これまでインターナショナルのプログラムを科学的に研究することもなく、実践的に事例に則して討議することもなかった。そこには、ブルジョア的な平和運動がそれまで鍛えていた思想的な充実もなければ、今日ヨーロッパの政治がさらにすすめるべき連合運動に十分な注意を向けることもなかった。この欠落の責任の一端は法と国家についての理論的な軽視にある。この面について、とりわけ国家批判についておこなわれていることは、数百年前のスコラ学に深く根ざしていて、政治的实践にとっては価値のないものである。
- [4] 私の論考“Innereuropäische Wirtschaftspläne”を参照。“Kampf”, Juli-und Septemberheft, 1932.
- [5] 私は、ファシストの裏切りの叫びに対して、論文“Novemberverbrecher?” (Wien Volksbuchhandlung 1932) で、意志疎通政策だけが民族を解放し、前進させることができると示した。
- [6] 方法のこの変化が、まさにドイツ人が再興し、世界に重きをなす確実な道であるということを、私は数年前に示している。(Der Tag der Deutschen. Berlin)
- [7] Krieg, Marxismus und Internationale.